

令和3年度の学校評価結果と令和4年度の推進策について

学校評価は、学校の教育活動や学校運営などの改善・充実を図り、より質の高い学校教育の実現をめざして行うものです。

今年度も本校では、保護者、生徒、地域を対象とした学校関係者評価アンケートを実施しました。また、校内でも、第2次世田谷区教育ビジョン及び学校経営方針に基づいた点検・評価を行い、こうした結果を学校関係者評価委員会に提出しました。

このたび受け取った学校関係者評価委員会からの報告書と本校の自己評価を踏まえ、「令和3年度の成果と課題」・「令和4年度の学校経営推進策」について、お知らせします。

令和3年度の成果と課題

I 重点目標について

(1) 時代の要請に応じた学力向上に取り組み、学びの充実を図る。

この目標は、4年間継続している目標である。本年度は、中学校での新学習指導要領全面実施の初年度であり、また、タブレット端末の全生徒への貸与など、教育の方法や環境が大きく変わる転換期でもあった。

この目標の指標とした、学校関係者評価アンケート生徒対象「わたしは、意欲的に学習に取り組み、よく考えようとしている。」の肯定的回答の割合は73%であり、昨年度とほぼ同値であった。また、「先生は、映像やタブレットなどのICTを利用し、分かりやすい授業をしている。」をはじめとした学習に対する設問は、ほぼ80%の肯定的回答を得ている。しかし、教員の自己評価では、「学びに向かう力を高める工夫をしている。」の「とても思う」の回答22%、「タブレット端末の効果的な使い方を試している。」の否定的回答10%など、まだまだ、時代の要請に応じた学びの充実に努める必要がある。今後は、①学習ガイダンスを充実させ、自分に合った学び方の習得をめざさせる。②教員一人ひとりが、経験に頼りすぎることなく、自己の授業スタイルに広がりがもてるようとする。③日常の授業以外に、個に応じた学習機会を増やしたり、充実させたりする取り組みを行う。以上の3点を実現させることが大事だと考えている。

(2) 自律と自信を大切にし、学校生活での充足感を味わわせる。

コロナ禍の学校生活2年目となる中でも、生徒が学校生活での充足感を味わうこととは、非常に大切であると考え、本目標を設定した。目標の達成のためには、学級活動、生徒会活動、学校行事の充実が欠かせない。学級満足度・学校生活意欲を測

る Q-U 調査では、不満足群に属する生徒が一昨年度から、23%→20%→18%（本年度）と減少傾向にあり、今年度は、満足群に属する生徒の割合は全国平均より約15%高い。また、教員の自己評価「生徒が運営する機会を増やしている。」の「とても思う。」の回答は37%（昨年度24%）、学校関係者評価アンケート生徒対象「学校行事は達成感がある。」の肯定的回答84%（昨年度81%）のとおり、特別活動の活性化には成果が見られた。しかし、前年度にも記したが、学校生活の充足感は限りなく100%に近い生徒に感じてほしい思いである。学校関係者評価委員会からの報告にも、「約2割が『思わない』と評価しています。引き続き、意欲的に学校生活が送れるための、個に配慮した対応の継続をお願いします。」との指摘もある。生徒一人ひとりに多様なチャンスを与え、認め励ますことを継続していくことが基本と考える。

「自律」は本校がめざす姿の中心となるものである。3年生に本校の特色を尋ねると、「自律心が育つ学校」という類の回答が予想以上に多い。学校スローガン「社会につながる実力の富士中」を具現する重要な要素として、生活と学習の両面の自律を図っていくことが大切である。

（3）心身の健康に努め、自分が属する集団への愛情と誇りを育てる。

昨年度に引き続き、感染症対策に万全を期すことが求められた1年となった。慢心することなく緊張感を保ち、対応を続けてきたが、1月末から2月にかけてコロナウイルス感染症の陽性者が相次ぎ、計5学級で各3日間の学級閉鎖措置を行った。

本校では、生徒が安心して毎日を送れるように、生活に関するアンケートを定期的に行っている。その回答を教員が共有する仕組みもできている。このアンケートの回答では、悩みや心配事を記述する生徒は減少した傾向にあったが、一方で「先生たちは生徒が相談しやすい」という設問に対する肯定的回答は70%に満たない。思春期特有の感情を十分に理解し、学校の教育相談機能を一層高めていく必要がある。

本目標の指標は、学校関係者評価アンケート生徒対象「『私は富士中生の一員として、よりよい学校生活や人間関係を築こうとしている。』の肯定的評価85%以上をめざす。」であった。数字的には高い目標設定であり、達成には2%及ばなかった。しかし、生徒対象の設問「先生は、生徒の意欲を大切にしている。」、教員対象の設問「校内外の貢献活動の機会を与え、励ましている。」の好結果は、成果だと捉えている。

II 家庭・地域との連携・協働による教育について

社会全体でのデジタル化が加速する中、本年度より、本区では新連絡システム「すぐーる」が導入され、欠席や健康状況の連絡の利便性が担保されるようになった。

次年度も感染症予防の必要性から、毎朝の健康状況を「すぐーる」で知らせてもらうことが続いている。生徒の健康や学習機会を保障する上でも、確実な伝達を保護者に求めることを継続していく。

学校関係者評価アンケート保護者対象「本校は、様々な便りなどで、保護者に情報を探している。」「本校は、ホームページやメールなどで、保護者に情報を提供している。」は、共に90%を超える肯定的回答を得ることができた。今後も、学校の考え方や時機に合った情報は「学校だより」で、保護者はもとより、日常の様子や学び舎を含めた地域に向けた情報は「ホームページ」で、緊急の連絡は「学校緊急メール『すぐーる』」でと、目的をすみ分けで発信していく。学校関係者評価委員会からの報告では、「IV 信頼と誇りのもてる学校づくりについて」の項において、「情報提供」「情報発信」といった文言が複数見られる。保護者や地域の方々は、学校からの正確でタイミングのよい発信によって、安心感や信頼感を得られるものであることを、再度肝に銘じていく。

III 「世田谷9年教育」で実現する質の高い教育の推進について

教員の自己評価「小学校の教員との合同研修は授業力の向上に役立っている。」の結果は、毎年否定的回答の割合が高い設問である。今年度は56%が否定的回答であった。(昨年度70%) 今年度は1学期の小中交流会で、中1生徒の情報交換を前年度小6担任と行ったり、小中の授業公開では、学習習得確認調査の結果から授業改善のポイントを明確にしたりなどの工夫は行った。しかし、ICTを活用した授業づくりが命題となる中で、合同研修が即、自己の授業力向上に役立つ実感をもつことはなかなか難しい。まずは、実施のねらいをはっきりさせることが重要だと考える。生徒の学びを豊かにしていくために、教科間のつながりを意識した授業が求められるが、中学校のそれは、学級担任制の小学校に比べ、実現のハードルが高い。このことを解消していくヒントは、小中交流会にもあるはずである。

本格的な実施初年度となるキャリア・パスポートは、記入する時間の確保が自然に行われるようになり、三者教育面談での利用は、先駆的な取り組みとして高く評価され、広く発信している現状がある。生徒が目標や見通しをもち、自己理解や自己効力感を深めたり高めたりするツールとして、キャリア・パスポートの活用を充実させ、小学校6年生から中学校入学直後の接続を、より確かにしていくことが大事である。

IV 教育環境の整備・充実と安全安心の確保について

昨年秋に、校舎の耐震補強工事が終了し、それ以前に行った体育館の補強工事と合わせて、計画通りの整備を進めることができた。校内通信ネットワーク環境は、タブレット端末の全生徒への貸与に合わせて整備が進んだが、まだ支障なく効果的

な環境とは言えない。区への提案を続けていく。タブレット端末が日常の学習の道具となったことは、安心安全な利用を徹底する上での課題が生じているという側面もある。生徒のモラル向上に努めていくことと、小中学校が一体となったガイドラインが必要である。

本年度も感染症対策には神経を使った1年となったが、健康・安心と教育活動の充実の両立は、次年度以降も工夫をしながら担保していく。

令和4年度学校経営推進策

1 学びに向かう力を高める取組（1）

朝読書の時間を朝学習の時間と変更し、この時間の使い方に柔軟性をもたせる。朝の読書は1日の導入として成果があるので、読書を基本とはするが、定期考査後に自己の振り返りを活かした学習に取り組むなど、自分に合った課題に自分なりに工夫して取り組む時間にも充てていく。1年生のコミュニケーションタイム、2年生の新聞学習は、表現力を高める学習の時間として、本年度同様、教科日本語の授業の一環として実施する。

また、生徒の学習ガイダンスの機会として、本年度途中から、学習相談を定期考査後から定期考査前に変更した。その成果を踏まえ、次年度も定期考査に向けた学習ガイダンスの機会として実施する。

2 学びに向かう力を高める取組（2）

授業での学習過程を大切にした教科指導を展開する。「めあて→見通し→協働的な学び・個別の学び→まとめ・振り返り」を基本デザインとし、各教科の内容などに適した学習過程を構築していく。校内研修のテーマ「ICTを活用した授業～探究的な学びをめざして～」を次年度も継続し、協働的な学びと個別の学びの両面での有効なICT活用について研究していく。生徒が受け身になることなく、「知りたい、学びたい、深めたい」という意欲をもつことを大切にした授業づくりを、組織的に探っていく。

3 学びに向かう力を高める取組（3）

総合的な学習の時間が、課題を見出し、解決する力を養う時間であることを踏まえて、各学年でSDGsに関する学習を段階的に実施していく。その中で、調べ、まとめていく力も身に付くよう指導していく。未来の自分と社会を結びつける学習を、総合的な学習の時間で行うことを一層明確にしていく。

外部人材の活用については、進路と日常生活に関連する講師を招き、効果的な

学習の充実を図る。

4 高い次元での自律した学校生活の実現

服装や頭髪などに関する本校のきまりを見直し、自分たちにとって何が適切かを生徒自らが考え、判断する力を養うことを重視する。その際は、学校生活での安全性や機能性を基準とし、学年や教員個人による指導の違いの解消を図っていく。

現生徒会委員が取り組み始めた、今後の「服装を考える日」のあり方の検討を続けさせ、生徒が主体となって、誰にとっても居心地の良い学校づくりを進めていく。

5 キャリア・パスポートの一層の活用

軌道に乗り始めたキャリア・パスポートをよりよい自己実現を図ったり、社会参画や人間関係の形成への意欲を高めたりする手段として一層活用する。1年生の4月の三者教育面談では、小6時のキャリア・パスポートの記述を踏まえ、中学校生活での明るい展望をもたせる。また、3年生の面談時は進路実現を材料の中心としつつも、短時間でも自己の取組を価値付ける時間を設け、生徒の自信の湧出に役立たせる。

また、朝学習の時間にキャリア・パスポートの見直しをするなど、目標を見失わない、自己教育力の高い生徒を育てる。

6 心の健康を保ち、安心感を与える時間の確保

魅力的な学校の土台となるものは、生徒と教員の信頼関係である。①休み時間と共に過ごす。②学習ガイダンスやキャリア・カウンセリングなど、生徒の多様な相談に応じる。③特別の教科道德では、それぞれの立場で一緒に葛藤する。など、心の交流の機会をなるべく増やす。教員が発する言葉は、生徒に多大な影響を及ぼす。言葉の感覚を磨く努力も怠らない。

さらに、教員自身が時間と気持ちに余裕をもつためには、業務整理を進めることが欠かせない。学校外の人材や学生ボランティアの活用も進め、教員が生徒と向き合える時間の確保に努める。

7 学校公開機会の保障

令和2・3年度は、コロナウイルス感染症の流行が断続的に続き、保護者が来校する機会を十分に保障することができなかった。今年度より改めることにした、通常授業の土曜日の学校公開（午後の部活動も含む）、また、2、3学期の保護者会前の5校時の授業公開を引き続き予定する。